

氏名	清家 美佳
ヨミガナ	セイケ ミカ
学位の種類	博士(映像)
学位記番号	博映第20号
学位授与年月日	令和5年3月27日
学位論文等題目	(論文) 消滅する他者と境—相原信洋の日記アニメーションの行方—
論文等審査委員	
主査	東京藝術大学 教授 (映像研究科) 山村 浩二
副査	東京藝術大学 教授 (映像研究科) 筒井 武文
副査	東京藝術大学 教授 (映像研究科) 布山 タルト
副査	同志社大学 准教授 (文化情報学研究科) 佐野 明子

(論文内容の要旨)

本研究はインディペンデントのアニメーション作家である相原信洋の作品を検証することで、個人によるアニメーション作品制作のあり方を問い、見直すことを目的とするものである。かつて相原は商業アニメーション業界に在籍しており、アニメーションを仕事とする中で技術を得ている。しかしながら、相原はドローイングアニメーションに留まらない多様な技法や、持ち得た技術を放棄しているかのような描画を用いた作風を生み出しており、彼の制作に向かう姿勢は多くのアニメーション作家とは一線を画している。また、彼のキャリアの中には大きな作風の変化があり、相原の作品の内容の変化が本人の置かれた環境と無関係では無い。その相原の作品の数々と姿勢、変化の過程を今再び検証することで、個人の制作のあり方を問いたい。本論文では残された作品と資料から、相原作品と相原の背作の姿勢への環境による影響を示すと共に、検証された変遷と表現方法から新たなアニメーション表現の探索と作品の提示方法、制作者の姿勢について論じるものとする。

The purpose of this research is to examine the films of Nobuhiro Aihara, an independent animation director, to question and reconsider the way animation films are created by individuals. Aihara started in the anime industry and acquired skills while working on commercial productions. However, he used a variety of techniques that were not limited to 2D hand drawn animation, creating a drawing style that seemed to have abandoned the skills he possessed, and his approach to production set him apart from other independent animation directors. In addition, there were major changes in his style during his career, and the changes in the content of Aihara's films are related to the environment in which he lived and worked. By reconsidering Aihara's attitude towards creation and the process of changes in his work and style, I would like to question the ideal way of creating independent films. In this dissertation, I show how Aihara's work and attitude toward production were influenced by the environment through the works and materials left behind, and based on the changes and methods of expression that I investigate, I discuss his exploration of new animation expressions, methods of presenting his work, and his attitude as a creator.

(総合審査結果の要旨)

清家美佳の論文「消滅する他者と境界-相原信洋の日記アニメーションの行方-」は、1965年から2010年まで72本の個人作品を残したアニメーション作家の相原信洋の作品の全容を明らかにし、その作品の意義を、同じ創作者であるアニメーション作家の筆者の視点で分析し、論じたものである。まず個人作家、特に日本のインディペンデントアニメーションの夜明けから、現代まで制作を続け、アニメーション史でも存在感の強い作家の基礎データとしてこれだけまとまったものに仕上げた資料的価値は高い。相原信洋自身のインタビューや著作は少なく、また先行研究も少ない中で、商業アニメーションのアニメーターとしての仕事の傍ら個人制作を続けた相原の作品を、現存する映像と当時のパンフレットやチラシ、同時代の関係者へのインタビューに基づいた丁寧な研究は、今後、他のアニメーション研究者や製作者への多面的な示唆に富む内容になっており、その高く評価できる。

「他者」と「境界」、「日記アニメーション」というタイトルに含まれる本論でキーワードになる論旨に関しては、もう少し踏み込めればよかったとの指摘もあった。特に晩年の田名網敬一との共作に関して、あまり本論で触れられていなかった点は、テーマとの関係で重要ではなかったとの反省は残された。

ただアニメーションと具象と抽象を往復できるアニメーションにおいて、作品の傾向が具象から抽象へと変化した点を、誰に向けての創作なのかという視点で、作家ならではの内的な制作への洞察と、筆者自身、相原の技法をなぞる実践を交えながらの論考は、最終的には相原作品に向けて大変興味深い言葉が紡ぎ出され、その点は、今後作家が作家を研究するこの映像研究科における論文の方法付けになる論となった。

この博士課程において、当初は実践博士として実制作と論文の二本立てで進めていたが、筆者が作品制作のスランプ状態に陥り、途中論文だけに切り替えた。しかしこの論文を書く行為自体が、作者のスランプからの脱却にもつながる予感を秘め、この論を書く必然性の強さを感じさせた。次第に論文が、当初の作品分析論から、誰に向けての創作なのかという、物作りの根源的なテーマにも通底する論に変化し始めた点は、論文自体も執筆者の作品のように、感じられ、また主査である私自身も創作者である点で、純粋に自分自身のための創作があり得るのか、他者の視線を意識しての創作で失われるものがあるのではないのかという問いかけを感じ、大変考えさせられた点、意義のある論になったと評価する。